
Blue Blaze Eyes

進道 悠輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Blaze Eyes

【ΖΖΠード】

Ζ4380A

【作者名】

進道 悠輝

【あらすじ】

全ては...禁断の魔術書から始まつた。悪魔に呪われた少年の...壮大な物語。

Prologue

オレは……魔術をなめていた。

あの日、”禁断の魔術書”とまで言われた『アルバテル』に手を出した……

それも……遊び半分な気持ちで……

思えばあのときから、オレ”たち”は呪われていたのかもしねりない。

母さんも……親父も……死んだ。

そして、弟は……

その日から……オレは一人になった。

砂嵐の中を横断する、影があつた。
旅をするにしては不自然な小さな影。

「ああっ！もう！」

砂漠の中心で、少年は歩き疲れたのか、突然叫び声を上げた。

「……見渡す限り砂漠砂漠つ！暑いし！喉は乾くしつ！もう最悪だ
……」

少年は駄々をこねる子供のようにもがき始める。

首を左右に振ると共に、彼の特徴ある真紅の髪が揺れ動く。

「水……ツ！」

そのとき、彼の瞳に何かが映つた。それは、まるで希望の光だつた。

「オツ……オアシス……ツ……！」

少年はすぐさま立ち上がり、田の前に見える水の宝庫へと足を進めた。

「よつし、蜃氣楼じやない！本物だ」

砂漠を歩き始め、早三日。久し振りに触れる、冷たい水に思わず声を上げる。

「つおおつー生き返るー！」

「ははつ。美味しいだろ？坊主」

背後から聞こえた、男性の声に振り返ると、橙色の鍔広帽子を被つた若い青年が立っていた。

「あんた……誰？」少年は睨みつけるように青年の顔を見た。とは言つても、警戒しているわけではなく、”坊主”と言われたのが気にな食わなかつたのだが。

要するに、彼は”子供扱いされる”のが嫌いなのだ。

「おやおや……そんなに怖い顔をするなよ。スタン君」

「なんで……オレの名前…？」

青年の言葉に、スタンと呼ばれた少年はキヨトンとしている。

「さあ……なんでだらうね？そんなことより、街なら此処から南西に向かつた先にあるよ。今のうちに水分を補給していくといい」スタンは何故か親切な青年の言つとおりに、空になつた筒の中に水を蓄えると、南西の方角へ向かつた。

「ありがとな、オッサン」

スタンが青年に礼を言つと、彼は不満そうに返す。

「おいおい、まだ26なんだがな」

「十分オッサンだろ」

「……うつ！」

しかし、それに対してもスタンは冷たく言い放ち、颯爽と駆けていつた。

スタンは無事に街へたどり着くことができた。先程の青年のおかげだ。

（砂塵の街 リヴァル……か）

スタンが街の門をくぐり抜け、中へ入ると、曲がり角から一人の少女が急ぐように駆け寄ってきた。

「たつ、助けて！」

「へ？」

彼女はスタンの後ろに隠れるようにしゃがみ込んだ。

「てめえもソイツの仲間か！」

後からゾロゾロと現れた数人の集団にあつといつ間に周りを囲まれる。

「うわつ！何すんだ！！！」

「黙れ！この泥棒風情が……！警察をなめるなッ！！！」

「はあ！？」

突然のことに気が動転していたこともあつてか、スタンもろとも彼女と一緒に牢へと閉じこめられた。

「どうしてくれんだよ……」

「……ゴメン」

横たわるスタンの隣でちょこんと座る彼女は、小さなつぶやくほどのか細い声で謝った。

「まあ、いいわ……無実だつてわかりや出してくれるだらうしな」スタンは背負っていた革のリュックを下ろすと、中からオアシスでもらつた水を取り出し、先程から俯いたままの彼女に差し出す。

「……いいの？」

「ダメだつたら差し出さねえよ……」

「……ありがと」

「なんでだ？」

「えつ？」

スタンが語りかけた突然の言葉に、思わず聞き返すしかなかつた。

「なんで、追われてたんだ……？」

「それは……」

再び、彼女はゆっくりと下を見たまま黙つてしまつた。

「盗んだのか？」

「違う……取り返した……だけ」

その言葉にスタンは溜め息を吐いてつぶやいた。

「だつたら、そう言えばいいだろ？」

「言えなかつた……怖くて」

スタンは彼女の言葉に対し、思わず立ち上がつた。

「怖いだと……ッ！？お前は罪を犯してないだろッ！？」

スタンは何を思つたか、思わず彼女の胸倉を掴み、怒鳴りつける。

「お前に……”本当の罪”を犯した人間の感じる恐怖がわかるのかよつ……」

「……ッ！」

怯える彼女を見て、スタンはハツとして、つぶやく。

「悪い……でも、言つてわかる相手じゃなさそつだな……」

「うん……」

「お前……大切なものを取り返そうとしただけなんだろ？」
彼女は「クリと、小さく頷いた。
「じゃあ……逃げるか？」

「逃げるつて……どうやつて？」

周りを見渡しても、堅く閉ざされた鉄の柱ばかり。どう考へても、人が抜け出せるスペースはない。

「こうするんだ！」

リコックの中に仕舞われていた分厚い一冊の本を取り出す。本は青い光を放ち、独りでにページがめくられてゆく。本のカバーには『The Key of Solomon』と書かれている。

辺りには風が吹き始め、スタンのコートがフワフワと舞い上がる。
(魔術書……！？ ソロモンの鍵……？)

そして、本を手に取るスタンの口が、ゆっくりと開かれる。

『神に似た者よ……ソロモンの名の下に具現せよ……』

大天使 ミカエル

牢の辺り一面が暖かく眩しい、金色の光に包まれてゆく。

光はスタンの右腕に集まり、徐々に形を作つてゆく。

細長く伸びた鋭い光を、スタンはその手で握りしめる。

光が薄れてゆくにつれて、金色のベールに覆われていたそれが、姿を現す。

(け……剣……？)

スタンの手に握られていた物は、鞘に収まつた、長い剣。ゆっくりと引き抜くと、鈍い銀色の鋭い刃に、金色の光が纏われ、妙な威圧感を醸し出している。

「頼むぜ、カイル……」

スタンの身体は、剣のときは全く違つ、蒼く透き通るような光を纏う。

彼の瞳は、先程までの澄んだ黒ではなく、鮮やかな青に変わっていた。
く。

(……何、あの蒼い田……?)

剣を手に舞を踊るかのような素早く、華麗な動きで、眼前の鉄の格子を一瞬にして斬り裂く。

「よし……逃げるぞ……!」

そう言つたスタンの瞳は、また漆黒の瞳に戻つていた。

「あつ、うん！」

思わず呆気にとられていた彼女も、スタンに手を引かれて走り出す。しかし、そう全てが簡単にに行くわけもなかつた。

「逃げるつもりか……?」

そこにいたのは、先程の警官だった。

「ああ……」

「逃がすわけないだる……?」

ニヤリと警官は笑い、懐から銃を取り出した。重い輝きを放つ、黒いフォルムが一層恐怖を感じさせる。

すると、スタンは両手を上げて降参する素振りを見せる。

「ちょっと……ほら、さつきみたいに魔術書で！」

「……無理、ミカエルとしか契約してねえんだよ」

「嘘ーッ！…?」

「何を「コチャコチャ言つてる? 死ぬ準備はできたか?」

警官は引き金に手を掛ける。

「くそつ！…!」

危機が迫つた、その瞬間のことだつた。

「……失せろ」

一瞬、肌に感じた風圧とともに田を開けた瞬間、そこに銃口はなかつた。

「誰だ……？」

スタンの田に映つたのは、全身を覆うようなマントを背に纏つた男。その手に握られた剣は鋭く光り、恐怖さえ感じさせる威圧感を放っている。

切り落とされた銃を確認すると、警備の男は悲鳴を上げて逃げ出していく。

「怪我はないか……”碧眼”」

「なんで……オレの田のこと！」

男の口から発せられた言葉は、スタンを酷く驚かせた。

極力、他人には隠し通していた自分の瞳のことを会つたこともない男が知つていていたから。

「闇じや、お前は有名だ。魔術書の使い手でありながら、悪魔の目を持つてゐるのだからな」

男の漆黒の髪は風に揺れる。扉の先から射し込む光に照らされて、輝いてるようにも見えた。

「ちょっと、話が読めないんだけど」

少女が頬を膨らませてつぶやいた。

「悪い！ とりあえず、逃げるぞ」

呑気に話をしている場合ではない。

スタン達は急いでその場を立ち去つた。

「で、自己紹介とか、しない？」

少女からの突然の言葉。沈黙の続いていた状態に耐えられなくなつたのだろう。

「そういえば、みんな名前も知らないんだな……」

「そ。あたしはリオ・シャリウス」

少女は提案した自分から、とばかりに名乗り出した。

「オレはスタン・クリード。よろしく」

スタンもニーッ「ワと笑って、自らの名を名乗った。

「僕は、ロイ・アズールだ。階級は闇騎兵軍、総指揮官」

「そつか。よろしくな。ロイ」

スタンは微笑みを浮かべると、早速とばかりに本題に移る。

「それより……田のこと。何でだ?」

スタンは先程とは打って変わって、真剣な表情になる。

「知ってる。確かお前の……」

「ハハ……そこまで知ってるのか。闇ってのは恐ろしいな」

スタンはロイの言葉に暗い表情を浮かべ、捨てるようにつぶやいた。

「そうだ。この田には……オレの弟が封じられてる」

「弟……」

リオは、切なそうに語るスタンを見つめていた。

「両親は死んだんだつたか?」

「ああ」

スタンは力無く返答する。嫌な記憶が彼の頭で巡り続ける。

「始まりはお前が……魔術書に触れたことからか」

「そうだ……そうだよつ……オレが殺したんだ……弟も、母さんも、

親父も!」

スタンは涙を浮かべながら、それ以上は思い出したくない。とばかりに、強く怒鳴り散らした。

「自分ばかりを責めることはない。危険な魔術書を記した人間にも罪はある」

「そんな気休め……クソ!」

スタンは悔しさを堪えきれず、俯いたまま愚痴を零す。

「気休め……か。そうかもしれないな」

ロイは軽く笑って、スタンの肩を叩く。

「調度いい、君を案内しよう。闇へ」

「……闇、へ?」

「そう、そして——そこに君の求める全ての答えがある」「ロイに案内された場所は、なんでもない普通の教会だった。意外と外装は新しく、汚れも見あたらない。そのため、壁が白く光っている。

「ここが……闇つてのオ！？　ただの教会じゃない！」

リオは納得がいかない、とばかりに愚痴をこぼし始める。しかし、それに対してもロイは説明を続けるだけ。

「ここが闇への入り口。全てを知るために中へ行こう」ロイに連れられ、教会の裏へ回る。なんでも、表面上教会を運営しつつ、裏では闇の組織として活動しているらしい。

「ようこそ、スタンくん」

オレンジ色の鍔広帽子は、どこかで見た覚えがある。

「あ……砂漠のオッサン！」

彼はオアシスで出会った男性だった。

「あんときはありがとな。で……なんでオッサンがここに？」

スタンが首を傾げて訊ねると、男性は

「簡単なことだ。私が……闇の創立者だからだ」

「闇の……創立者」

「そう。そして君の求めるものはこの先にある」

彼が指差したのは、幾つかの扉のうち、一つだけの黒い扉。

「そこに……全てが」

スタンは、つかつかと歩き、扉に手をかける。

「スタン。これを持って行け。役に立つはずだ

「ん？　わかった」

ロイはスタンに、自らの腰に納めていた剣を手渡した。

「リオちゃん……だつたかな。君も行きなさい。君の求めるものも

……そこにあるはずだ」

「……はい」

リオもスタンに続くようになり、ドアノブに手をかけた。

「そういうやせ……リオ、お前が守りうとしてた……大切なものって、なんだつたんだ？」

「……ペンドント。お母さんの……最後のプレゼント」

リオは悲しそうに、俯いた。

「最後……か」

「うん。いつの日か、いなくなつてた。私は、お父さんと一人で旅に出たつて聞いてたんだけどね。それが、二人とも死んだつて気づいたのはそれから五年も後。笑っちゃう」

「…………ううか」

扉の向こうには、何もなかつた。まさに、闇そのもの。暗い空間で、近くに誰がいるのかもわからない。

「やだ……何これ」

「…………闇」

徐々に紫色の光で辺りが照らされる。それと同時に、そこには佇む影をも映し出して行く。

「なんだ……アレ」

「まるで……悪魔」

そこにいたのは、漆黒の翼を生やした魔物。その経常は、何かで見た悪魔そのものだった。

「我は全てを司る者。お前たちのことも知つていた。我は世界を見た。蒼き瞳を通じて」

悪魔は重たそうに口を開く。

「蒼き瞳……オレの田の」とか

「その通り。なぜならば、あの口に貴様が開いた魔術書は、我のも のだからな」

悪魔の言葉に、スタンは驚愕するしかなかつた。

「そして、小娘。お前の両親も魔術書のために死んだ」

「え……！？」

リオは、瞳を大きくして、悪魔にすがりついた。

「何それ……どういうことつ！？」

「その日、スタンが開いた魔術書は事実上『アルバテル』ではないのだ。まして、今手にしている『ソロモンの鍵』も本物ではない」悪魔は次々と彼らの知らなかつた真実を語り始める。

「その一つは、小娘の父親が記した魔術書。『蒼焰の瞳』の一部だ

「……お父さんが、魔術書を……？」

スタンもリオも、自分たちの知らないところ、そんな繋がりがあつたことに驚くばかり。

「だからといって、なんでお父さんたちが死んだの！」

「魔術書の封印が解かれたからだ。だから、魔術書の関係者の命と引き換えに、我が生まれた。その少年の手によつてな」

「……！？ オレのせい……なのか」

悪魔の言葉は、スタンの心に突き刺さつた。

自分が魔術書に手を出したせいと、リオの両親は死んだ。

今まで感じていた罪悪感がより強くなつていく。

「いや……お前のせいではない。スタンよ……お前の瞳に命は今もある」

そう言われても、スタンはいまいちピンとこなかつた。

キヨトンとしているスタンに、悪魔は一言、囁くよつと呟つた。

「我を……殺せ」

「どういう意味だよ！」

スタンは悪魔の考えが理解できず、怒鳴り声で訊ねる。

「その瞳は我そのもの。貴様の弟の持つ精神力……そして、貴様と弟との繋がりを利用して碧眼を貴様に植え付けた」

スタンは冷静にその言葉を受け止めた。

「つまり……あんたが全ての命を囁つていい。そして

あんたを殺せば、全てが元に戻る。

「やうじゅう」と……だな?」

「その通りだ。殺せ。我はもう生きる必要はない。お前を通じて、十分に生きた」

スタンは隣で怯えるリオに優しく語りかける。

「戻そう。全てを、オレたちの手で」

「うん」

スタンはロイに渡された剣を構える。リオはその手に自らの手を重ねた。その刃は、悪魔の心臓を貫いた。

それから数年の時がたつた。

「母さん！ 重いよお……！」

幼い少年が、幾つかの紙袋を抱えて、母親に嘆いている。

「我慢しなさい、カイル。お兄ちゃんを見なさい！」

少年が母親に言われて、指の指す先を見れば、たくさんの食材を抱える兄、スタンの姿があった。

「いいよ。これぐらい平氣だつて！」

スタンは会話を聞くと母親のほうを向いて、ニッコリと笑った。

（オレの犯した罪の重さに比べたら……この野菜なんて、軽いもんだよ……）

アズール隊長、南西のB地点に、怪しい動きを見せる者がいるとの報告が

鎧姿の男が、黒いマントの男のもとへと大急ぎで駆け込んだ。

「そりか……丁度いい。手が空いてるし、僕が向かう。他の隊は君が指揮を取れ」

「はつ……」

（全く……あのオッサンの跡を継ぐのも乐じやないな）

心中でそつづぶやいて、ロイはその場を後にした。

「また失敗！ お母さん、味付けわかんないよ！」

「またあ？ だいたい、何でそんな張り切つてつくるの？」

大好きな母親と楽しそうに、手作りのクッキーを焼くりオ。

「うん。あげたい人がいるんだ」

頬をほんのりと紅く染めて、リオはつづぶやいた。

「へえ……」

満面の笑みでリオは続けて、母親にこう言つた。

「そんでねつ。その人に……」

『ありがとう。』って言いたいのー

そして時はまだ、ゆっくりと動いている。少しずつ、また少しずつ。

Blue Blaue Eyes - END -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4380a/>

Blue Blaze Eyes

2010年10月9日07時22分発行